

(実践報告) 抄録用紙

|                    |                           |
|--------------------|---------------------------|
| 演題名<br>(全角 80 字以内) | 実父の看取りの経験から夫の在宅看取りを選択した事例 |
| 演者名                | 矢後めぐみ 山本美和 石黒裕美 入江貴子      |
| 所属                 | 富山医療生活協同組合 富山協立病院         |

目的

実父を自宅で看取った後、夫も癌を宣告され、自宅で最期を迎える選択をした妻と患者との関わりを通して今後の在宅見取りの可能性を考える

実践内容

妻は、3年前に実父の在宅看取りを経験した。当時、夫が自宅で最期を迎えさせてあげようと協力してくれたことが心に残っていた。癌を宣告された夫に対して、今度は自分が自宅で出来る限りの事をしてあげたいとの思いがあった。闘病生活の後、緩和ケアとなり在宅での療養生活を選択した。往診当初から、妻はとても穏やかだったが、夫婦での付帯的な看取りについての話し合いはされていなかった。往診スタッフと家族で残された時間の過ごし方を積極的に話し合った結果、当初表情が硬く、自分の希望や要望を口にする事が少なかった夫だったが、「生家に外出したい」という希望を引き出し実現することが出来た。

実践効果

本人と妻だけではなく、子供や、実兄が外出に関わり本人の残された尊い時間を共有することで、心のケアにも携わることが出来た。本人からは「ありがとう、子供のころに気持ちが戻った」という言葉が聞かれた。外出の3日後永眠された。

考察

妻は1度看取りを経験していた事で、看取りに関するイメージがある程度あり、今後どういう事が起こりうるか予測できた事や、実父の看取りの時に関わっていた往診スタッフが夫の看取りにも関わっていたことで、信頼関係をスムーズに築くことが出来、残された時間の過ごし方への提案もスムーズに受け入れ実行につながったのではないかと思う。さらに義父の看取りの経験は、患者自身が自宅で最期を迎えるという事を選択肢として考えるきっかけとなっていたと思う。私たち在宅スタッフが、丁寧に在宅看取りを実現していくことで今後の在宅看取りが波及してのではないかと思う。